



Title	二人の青年像 : テインペーミンの2長編に見る主人公描写
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪外国語大学学報. 1979, 44, p. 53-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80741
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

二人の青年像—

テインペーミンの2長編に見る主人公描写

南 田 み ど り

The Characterization of the Two Students by Thein Pe Myint

MIDORI MINAMIDA

Thein Pe Myint (1914–1978) wrote so many proses such as novels, dramas, essays and so on. Novels are mere one part of his works. But he thought much of his novels and loved his novels like his children.

Although Thein Pe Myint's novels are known as "political novels," as a matter of fact, such novels are not so many numbers. Especially after 1958, the content of his novels has changed gradually. Political atmosphere disappeared.

It is because most of so-called "political novels" were so prominent that he has been called political novelist. The most of the stages of such novels are not present day Burma, but before and after independence day of Burma. In such novels, there are two long novels whose heroes are students. One is "The Student Boycotter" written in 1937, published in 1938, and the other is "As Sure as the Sun Rising in the East" written in 1950–53, published in 1958. The time of the former is 1935–36, that of the latter is 1936–42. It sometimes happened that the latter was regarded as the second series of the former. But there is the definite difference in these two novels. One of the differences is that of the characterization of their heroes. Nyo Tun of "The Student Boycotter" is the perfect character, and Tin Tun of "As Sure as the Sun Rising in the East", who develops to the perfect later, is the imperfect character. The difference was brought by the political experiences of Thein Pe Myint. Nyo Tun was the reflection of young Thein Pe Myint's spirit who did not know defeat. Tin Tun was the reflection of middle-aged Thein Pe Myint's spirit who experienced so much trouble in

Burmese political world. In other words, two heroes show some aspects of Thein Pe Myint's political struggle through the independence of Burma. Although Thein Pe Myint died in 1978, they live still now in the world of novels vividly.

は じ め に

小説は、テインペーミン（1914～78）が45年の作家生活で残した著作の山のごく一部を形成するにすぎない。だが小説は、彼の心に大きな位置を占めていた。彼は、ハイスクール時代から小説家をめざした。そして自分の小説のすべては、我が子の様に愛した。小説家としての出発点で彼が意図したのは、簡潔な口語文体とビルマ独立闘争の武器となり民衆に奉仕する小説であった。

「この強慾とどまるところを知らぬ帝国主義者の時代に、この厚顔無恥で無慈悲な弱肉強食の時代に、純文学なるもののみを書いてはいられない。甘く優しい山鳩の鳴き声のみを愛でてはいられない。」⁽¹⁾一部に彼が「政治小説家」⁽²⁾と評価されたのは、その文学観ならびに政治家としての華々しい活躍のためであった。だが全小説中「政治小説」の名に値するものは実は半数に満たない。短編小説では、初期から政治色のない技法中心のものがあつた上、1958年を境として政治的色彩は消えた。長編小説でも、1953年迄の5編のみがその名に値する。彼の小説の一部が「政治小説家テインペーミン」のイメージを与えるほどの光彩を放つたのであつた。それらは又、現代ビルマ文学の流れを語る上で見すごすことのできない作品群である。その舞台のほとんどは、独立前のビルマであつた。

5つの長編のうち学生を主人公としたものが2編ある。「ダベイフマウチャウンダー（ストライキを打った学生）」（1937）と「東より陽の昇るがごとく」（1951～53）である。前者は1935～36年の、後者は主に1936～42年の独立運動を背景とする。時代と主人公の設定は類似するが、2作は姉妹作ではない。2人の主人公像はまったく対照的である。2作の間には14年間の時の経過がある。それはビルマ史上の大きな激動期、作者自身にとっても試練の時期であつた。主人公像の相違は何を物語るのか。テインペーミンの14年におけるこの2作品の意味するところは何か。

1

ビルマの長編小説を論じる際、この2作品にふれられることは多い。⁽³⁾一般的な見方として「ダベイフマウチャウンダー」は、反植民地闘争をビルマで初めて正面からとりあげた作品としてのテーマの斬新さ、筋の高揚がなく事件の進行と共に展開する記録の手法が注目され、「東より陽の昇るがごとく」は、すぐれた記録性、描写力、表現力を持つ当時最長の大河小説として評価される。後者は1958年度サベベイマン⁽⁴⁾賞受賞作品でもある。

前者の主人公ニョートウンは完璧な英雄であり、後者の主人公ティントウンは欠点に満ちた未

完の青年である。この2人の比較について作家ミヤタンティンが「私が続編を書きたい小説」(1974)の中で若干ふれた。彼はニョートゥンを高く評価し、ティントゥンを否定的に見る。「ダベイフマウチャウンダー」はミヤタンティンが少年時代感銘を受けた10編の長編小説のひとつであった。「私が続編を書きたい小説」は、ミヤタンティンとその後の主人公達との対面対話の形式をとったそれら10編の作品論である。「ダベイフマウチャウンダー」が僅か10才の少年に強烈な印象を与えたのは、簡潔明瞭な文体で描かれた主人公像の故にであった。ニョートゥン像はミヤタンティンのみならず当時のビルマ青年の模範的英雄像となった。1936年のラングーン大学学生ストライキの指導者の一人ニョートゥンの魅力としてミヤタンティンは、その進歩的思想、闘いのために愛を捨てる献身性、労働者との連帯を重視する先見性、敗北に屈しない魂等をあげた。ミヤタンティンの不満は、ストライキ解除に反対演説中ニョートゥンが昏倒することにより物語が閉じられたことであった。ストライキ終結という史実は曲げられないにせよ英雄ニョートゥンのその後の闘争が続編として描かれるべきだというのである。だがニョートゥンの姿はストライキの終結と共に永久に消え去った。

ミヤタンティンはニョートゥンとティントゥンの決定的な違いを「気概」であるとする。彼は闘争における主人公の動揺性を必要としない。「すべての人間には意識の高揚と共に意識の低迷もある。資本家であれ労働者であれ高揚と共に低迷がある。それらを書かねばならない。それが人間社会を正しく描くことだと彼等は言う。私はこれに反対だ。すべての人間に高揚と低迷があるというのは正しい。だが作家に階級的立場があれば、彼の支持する階級の高揚がもっと輝くよう光を与えるべきだ。低迷はほかすべきだ。彼に敵対する階級の低迷をもっとくつきりさせ、高揚を例外視すべきだ。これこそが階級的見地というものだ。」⁽⁷⁾2人の主人公の気概の相違は作者の気概の有無を反映すると、ミヤタンティンはティンペーミン自身の階級的視点に批判をむけた。

文学の階級性をビルマで最初に唱えたのは、他ならぬティンペーミンであった。彼は1948年、それによって「新文学論争」⁽⁸⁾の口火を切った。ティンペーミンの主人公観はミヤタンティンのそれとは異なる。長編小説におけるティンペーミンの主人公描写は二通りある。第一は首尾一貫して完璧で通す方法である。ニョートゥンの他に「ティーターピョン」⁽⁹⁾(1968)の聡明な美女ティーターピョン、そして「テッポンジー(進歩僧)」(1938)の破戒青年僧ウトゥダザも徹底した悪役としてこの方法に入る。第二は未完成から成長の過程を示す方法である。「現代の悪霊」⁽¹⁰⁾(1939)のニュンマウン、「海の旅人と真珠姫」(1966)のマウンタンズィン、そしてティントゥンがこれに入る。ティンペーミンは小説の手順として第一にテーマ、第二に人物描写、第三に構成を重視した。主人公像はテーマに応じて使い分けられた。ミヤタンティンの批判に彼が直接答えることはなかった。だがミヤタンティンがそのベストセラー「刀の山を越え火の海を渡り」⁽¹¹⁾(1973)で肉体労働者を完璧なものとして理想化し、知識人を欠点だらけの人間として描いた点を批判的に見る。⁽¹²⁾共に文学における階級性を強調しながらこの2人の作家の間には相違する見方がある。その一端が主人公像のとらえ方に具体的にあらわれたのである。激動期における闘う主人公の動

揺性は作品にとって無用のものであるのか。次に2人の主人公像をたどってみよう。

2

「ダベイフマウチャウンダー」は「テッポンジー」に次ぐ2作目⁽¹³⁾の長編小説であった。「テッポンジー」は仏教界退廃の根源を植民地体制に求めはしたが、反植民地主義の闘争を扱うには至らなかった。「ダベイフマウチャウンダー」でテインペーミンは初めて植民地制度の害悪を告発した。これは「テッポンジー」と同じくインドで書かれ、1938年2冊に分けて出版され、1966年1冊にまとめて再版された。第一部は、1935年マンガレーカレッジを卒業したニョートウンのラングー大学進学、ニョートウン達進歩的學生グループの活動、その他あらゆるタイプの學生像の実態、大学制度の問題点の指摘、ニョートウン達の學生自治会執行部進出、學生の処分問題、ストライキの決定等が時間的流れに沿って語られる。第二部はストライキの開始から終結迄が新聞記事演説等をまじえて描かれる。テインペーミンは、1935年度の自治会執行委員をつとめて同年卒業、ストライキ時には学外から最大限の援助を与えた。ストライキ中にミャンマーアリン紙特派員としてインドに派遣され、ストライキ終結現場にいなかったことがその衝撃を大きくした。事実関係の詳細な調査の後彼はストライキ解除を誤りだと判断し、解除反対という自分の主張を訴えるためにこの作品を書いた。

ニョートウンは主人公でありながらその登場場面は限られる。彼は作品の進行係ではない。作品は事件の時間的経過と共に進行するからである。作者は主人公の個人的体験として事件を描くことを避けた。主観的主張をそのまま押しつけず、記録小説として事件の客観的再現から結論を読者にゆだねようとした。ニョートウンは半ば作者の分身で、その代弁者の役割を与えられた。抑えた記録的文体の中でニョートウンの演説やニョートウンの書く記事に作者の熱い思いが注ぎ込まれた。作者の分身が脇役に登場する長編は他にもある。「テッポンジー」ではナショナリズムあふれる高校生トゥンシェインが作者の仏教界批判を伝えた。「現代の悪霊」では主人公の成長を支える映画ディレクター・トゥンミンが、性病を温存する植民地体制を批判した。だが主人公が作者の分身であった例は他にない。作者の主張の激しさが主人公との同一化を生んだのである。同時にニョートウンは、当時の進歩的學生の典型であり理想像でもあった。テインペーミンは、自分の主張と願望のすべてをこの青年に託したのである。

無造作な服装にいつも頭髪を乱した精悍なニョートウンは、既にマンガレー時代から英語の書物でマルクス主義にふれていた。だがそれは彼の中に定着したとは言い難く、ときには孫文ときにはヒトラーを礼讃し、当時の進歩的學生の混乱した思想状況を反映する。彼は、労働者農民を描かない当時のビルマ文学に飽き足らず、自らエッセイを書き雑誌に寄稿している。音楽は心を軟弱にすると考え、伝統芸術の意義も認めない。下級生達に読書のアドバイスを与え、学外では労働者対象の無料夜間学級を開いて啓蒙に努める。これらは作者自身の思想と行動でもあった。

その上に厳格さ、意志力、自己犠牲的献身性が加えられ、ニョートゥン像は完璧に近づく。鋭い観察力で人を見抜き、口先だけの人間には心を許さない。自分にも他人にも厳しく、妥協を好まない。必要ならば仲間をも徹底的に批判する。彼の苦悩は、わずかに女子学生への思慕を克服する過程に描かれるにすぎない。進歩的女子学生ターミンへの愛の自覚はニョートゥンに葛藤を与えるが、それは長くは続かない。指導者の恋愛がストライキの士気に及ぼす影響をおそれ、彼は闘争を優先させる。昼夜分かたず献身的に活動し病に倒れる。当初の要求が獲得できないままストライキ終結が決定された直後、彼は病を押して駆けつけ再び立ち上がるよう呼びかける。げっそりと痩せ、血の気のない顔に目だけ輝かせて絶叫するその姿は凄絶な執念の権化である。ニョートゥン像は他のすべての学生像を圧倒する。客観的描写と主人公の硬さのもたらす緊張感を緩和するのは、あらゆるタイプの学生像である。実在の人物の大半はその後の影響を考慮して変名にされた。実在架空の脇役を駆使し、作者の筆はのびやかに動く。ノイローゼでストライキから脱落するニョートゥンの親友、自分の世界にとじこもる助手、立身出世とストライキの板ばさみになる貧乏学生等はニョートゥンと対照的なキャラクターとして配置されるがむしろ生き生き光る。ニョートゥンのみが慎重に描かれたのは、作者の代弁者、作者の理想像という重い役割を与えられたからであった。

3

1年前の事件の再現を通して作者の政治的主張を訴えた「ダベイフマウチャウンダー」の切迫感は「東より陽の昇るがごとく」にはない。ここでは10数年前の一連の諸事件が4年の才月をかけて再現された。記録の手法はさらにダイナミックな展開を見せる。1936～42年のビルマ独立運動は、背景でありながらそれ以上の重みを持って丹念に語られる。ティンパーミンは、終戦直前亡命先のインドでエレンブルグの長編「パリ陥落」英語版を読んで以来、歴史的激動を背景とした大規模な長編小説の構想を暖めていた。⁽¹⁴⁾ラスト近くからの日本軍政下のビルマは、ナチスの進攻で終る「パリ陥落」を想起させる。独立運動を背景に、25才のティントゥンが心の遍歴を回想形式で語る。彼は小説の進行係であり、語られるものは個人的体験としての独立運動である。「現代の悪霊」での主人公の心理描写中心の進行法や、「開けゆく道」(1948)⁽¹⁵⁾の歴史と個人のかかわりの描写がそれぞれ「東より陽の昇るがごとく」に受け継がれた。冒頭のティントゥンの生いたちの回想やその後のいくつかの場面に作者自身の体験が使用されているが、ティントゥンは作者の分身ではない。「現代の悪霊」迄の3長編には作者の分身が登場したが、「開けゆく道」以後作者は本名で登場する。ビルマ独立運動を飾る多くの政治家の中からティンパーミンの名をぬくことはできなくなったからである。

作者より3才若いティントゥンは、軟弱さ、甘え、移り気、うぬぼれ、優柔不断等未熟な青年らしい弱点を持つと同時に、青年特有の純粋さ、ひたむきさ、ヒューマニズム等を内に秘めてい

る。ティントゥンを変革する第一のものは激動する時代の波である。貧しい測量師の父は次男⁽¹⁶⁾ティントゥンが試験に合格して高級官僚になることを望み、学生運動にかかわることを禁じた。父親の権威は1938年のいわゆる「1300年大事件」の頃迄ティントゥンを束縛した。⁽¹⁷⁾自分の願望ではないが親の恩に答える義務として彼の心の片すみに立身出世の夢が存在した。故郷・上ビルマからラングーンに出て、タキン党の活動が活発な下町に下宿すると「もし一人だったら自信はないが、みんなが支持するのなら」と人々の後からタキン党に同調する。1936年ストライキには「水に浮かぶ浮き草のように」多くの学生と共に参加し、ストライキ長期化と共に多くの学生同様帰省する。この時期迄の彼の意識と行動は、多くの学生のそれを平均したものであった。変革の第一の契起は1938年7月の反インド人暴動⁽¹⁸⁾であった。博愛主義的人道的立場から事態収拾に協力した彼は、やがて事件の本質を見る目を持つ。⁽¹⁹⁾おそろおそろタキン党の後を歩いていた彼が一転して「俺ほどの者がこの世にしようか。」と鼻高々でタキン党のパンフを売り歩くに至る。だがこの高揚は彼の真の覚醒ではない。心配して上京した父の戒めやタキン党の内紛はただちにその心を攪乱させる。だが刻々変化する情勢は彼に変革の第二步に足をふみ入れさせる。1938年末からの石油労働者のラングーンへの示威行進支援の活動で彼は中クラスの指導者に任じられる。行進する労働者から受けた感動、学生指導者の逮捕、仲間の死、抗議ストライキ等の中で彼の心は次第に父の束縛を離れ、社会主義にひかれてゆく。だが学生ストライキの早期終結は彼を再び動揺させる。終結決定を不満としてストライキを再開する一部学生に心情的にひかれ、彼等を説得する自信がない。それは傍観者であった以前とは異質の、運動の内部にあるものとしての悩みであった。彼は、私欲を捨て献身的に活動する指導者達への信頼から、闘いを捨てることは思いとどまる。だが心の停滞は根深い。大学卒業後、新聞社で電信ニュース翻訳を生業としつつ政治活動に協力するが、独立運動と直接に結びつかない自分の職業を恥じるようになる。恋愛においてあやまちを犯し、仕事を捨て年上の人妻の経済援助を受ける。一方人民革命党⁽²⁰⁾に入党を許されマルクス主義学習教室に熱心に通う。革命と退廃の二重生活が続く。だが時代は彼に三度目の飛躍の機を与えた。それは日本軍の進攻にはじまる。人民革命党より派遣されたマンガレー北部の森林で、彼は日本軍からの独立武装蜂起援助の武器投下を待ったが徒労に終る。その心に対日不信が芽生える。交通機関を遮断され、徒歩でラングーンへむかう途中日本軍の進攻を知る。やがて日本兵達を目にし、その蛮行に不信感は一層につく。ラングーンに戻り、妻に暴行する日本兵を殺害した友人を助けて市内に潜行する。独立運動が対日協力に解消され運動の母体が崩壊同然の上は、自分で考え行動せざるを得ない。後退は死を意味する。日本軍に希望を託すビルマ人がまだ多い中を、彼は一足早く抗日闘争をめざす。自らの頭と足で得た抗日の気概は深く心に定着する。「東より陽の昇るがごとく我等の時代来たり」とタキン党の党歌の一節を口ずさみ、彼は固き決意で困難な地下活動に入ってゆく。混沌—上昇—低迷、前進—後退の繰り返しの中でティントゥンは時代により徐々に変革されていった。

彼を変革する第二の要因は4人の女性との愛である。「ティントゥンは高まりゆく1300年反植民

地闘争で何もなかった。意気消沈していた。ジャーナリストを装っていた。逃避していた。人妻と密通していた。マミヤフミ―マミンウ―マキンティッという3人の女性の間をあちこちへ揺れていた。⁽²²⁾とミヤタンティンは彼のすべてを否定的に見る。1300年事件がティントウン変革の決定的要因とならず、ティントウンがその中で有効に動き得なかったのはティンペーミンの意図によるものである。さらに、ミヤタンティンが批判する恋愛の扱いは従来のティンペーミン色を脱した。過去の画一的な女性像や愛の形をはるかにしのぐ描写となった。それはティントウンの性の目覚めにはじまり、その女性観の変遷が多様な愛の中で語られる。最初彼に影響を与えたのは、僧院で共に修業した先輩見習い僧コバタンと父親であった。女性を蔑視し、視線が合えば好かれているとうぬぼれる時代が続く。第一の女性ウィンニペーは彼のその古い女性観のなごりの対象である。その美貌と近代的装いの下には、前途有望な男との結婚を待つという古さがある。ティントウンの意識の高揚にともない、彼女は過去の人となる。第二の女性・1才年上の女子学生マミンウとの対等親密な交際は、彼の古い女性観を変えた。互いに内心好ましく思っていることは口に出さず政治や文学を語り合う。ナショナリズムは強いが政治活動よりも文献に埋もれビルマ文学を研究する方が似合う彼女の存在は、ティントウンの活動激化にともないしばしば遠くなる。彼女の深い愛情に包まれながら彼はそれに答えない。彼女の死によってその存在の大きさを初めて知るのである。第三の女性、美貌の実業家で10才以上年上のマミヤフミとの愛が批判者の標的であった。かつてロシア語版出版にあたり、あまりの長さにダイジェスト化が提案され、マミヤフミ関係の場面が削除の対象にあげられた。だがティンペーミンは「起こりうることを創作したのだ。」⁽²³⁾とそれを拒んだ。この愛は、あやまちを犯しやすい青年の弱さの集中心であった。マミヤフミは反インド人暴動の時彼に救われ、その後彼の最大のスランプに乗じて心の空洞に入り込む。不邪淫戒を破る罪の意識にさいなまれながら、病気の夫に束縛される彼女への同情で「彼女の苦しみを解消してやれるなら2人で地獄におちてもよい。」と彼は合理化する。頭の回転が早く商才にたけたマミヤフミには、2人の関係など逃避にすぎず、ますます事業に精を出す、若いティントウンは「妖怪に会って魂をぬきとられた人」のように消耗し、愛と憎みの間で葛藤しながらもマミヤフミの網から逃れられない。この弱さの克服はその抗日闘争の出発を待たねばならない。商売の上とはいえ日本軍将校と親密にする彼女の姿が、ティントウンに別れの決意を固めさせるからである。彼の未来に光を与えるのが第四の女性・マキンティッである。彼より7才年下のこの高校生は、政治意識が高く行動は激しく学生ストライキ中止に反対して登校を拒否する。ティントウンは彼女の家庭教師をする中でその年に似合わぬ聡明さを頼もしく思い、「花を育てる庭師」のように接する。だがマミヤフミとの関係を恥じ、彼はマキンティッから遠ざかる。彼が抗日闘争に身を投じる時、同じ志を持つマキンティッと再会する。新しい闘争のひそやかな出発はティントウンを退廃から救い、新しい愛をもたらした。ティントウンは4人の女性の間を同次元で動揺したのではなかった。古い女性観の対象ウィンニペー、新しい男女関係を示したマミンウ、彼の弱点に結びついたマミヤフミ、希望の象徴マキンティッ、こ

れら4人はティントウンの心に大きな軌跡を刻み、ティントウン変革の側面的要因となった。

「東より陽の昇るがごとく」は主人公の心理描写をはじめあらゆる面で「ダベイフマウチャウンダー」よりスケールが大きい。背景である独立闘争は、作者独特の明快な文体で様々な角度から豊かに再現され、厳しい日本軍政下の抗日闘争の芽という解放への道筋を示してしめくられる。政治家、独立運動の闘士等実在の人物はそのまま登場する。実在架空をまじえた脇役は学生のみならず労働者、農民、都市勤労市民等多様な階層に及び、数は膨大である。彼等の姿は闘争とのかかわりの中で現実性をもって浮き上がる。「ダベイフマウチャウンダー」でふれられる余裕のなかったビルマの伝統習慣が庶民の生活をとおして描かれる。舞台はラングーンにとどまらずマングレー等上ビルマ、シャン州に及び地方色があらわれる。「ダベイフマウチャウンダー」より深く広く語られるビルマ独立闘争の中で、動揺を重ねつつ変革していく主人公の過程はリアルに緻密に描かれた。戦闘的主人公像のみが被抑圧階級解放の立場に立った作品を作るのではないことを、テインペーミンはこの作品を通して語ろうとしたようである。ミヤタンティンは主人公は典型であるべきだと考えたが、英雄の典型ニョートウンと共にティントウンも又、当時の平均的ビルマ青年の典型であった。ミヤタンティンのティントウン批判の中心はむしろ2作品の間に存在するテインペーミンの生きざまにあるようである。2人の主人公の「気概」の相違の原因をミヤタンティンは作者のそれに求めるからである。その14年間の中でこの2作品はどのような位置を占めるのか。

4

「満足できるほど有意義にすごせた年月ではなかった。成功より失敗に満ちた人生の旅路であった。だが人として生まれたからには、自分と共に存在する人の世の安定と進歩のために、失敗成功は別にして活動すべきだという当然の考えを信じて活動してきたのだ。」⁽²⁵⁾とテインペーミンは1954年40才をむかえるにあたり回想した。

テインペーミンの挫折を知らない上昇期は1938年迄であった。1933年、彼はラングーン大学入学後まもなくタキン党に入党し、同時に短編小説家としてデビューした。1935年ラングーン大学卒業後、当時のビルマでは珍しく文筆のみで生計をたてる幸運な専業作家の一人となった。政治活動は創作の障害になるどころか創作のエネルギーの源泉であった。1936年、彼はインドで新聞特派員、広告代理業で生計をたてながらカルカッタ大学に進学した。ベンガル州学生連盟執行委員としての活動の中でインド共産党員と接触し、その激しいナショナリズムは共産主義思想に吸収されていく。テロリズム、ナチズム、ガンジー主義等にひかれる多くのビルマ青年活動家達より一足早く彼はマルクスレーニン主義を信奉する。その頃書かれた「テッポンジー」「ダベイフマウチャウンダー」は長編小説家としての彼の名を世に知らしめた。「ダベイフマウチャウンダー」は挫折を知らない血気盛んな23才の作者の魂そのものであった。タブーとさえいわれる仏教界にメス

を入れた「テッポンジー」ではさすがの彼も真正面からの批判を避けた。説法や偈を駆使して諷刺的文体に徹し、わずかに脇役に批判を語らせるだけであった。テインペーミンの長編中反植民地主義の情熱を正面からぶつけた唯一のものが「ダベイフマウチャウンダー」だったのである。運動の未分化の時期、彼には前進のみがあった。ニョートウンの気概はテインペーミンのそれでもあったのだ。36年ストライキがビルマ独立運動が力量をたくわえる上で小さくない役割を果たしたことは衆知の事実である。解除の直接原因となった学生の団結の弱さや指導のまずさも当時の独立運動の水準から見ればやむを得なかった。テインペーミンの直接の執筆動機は色あせたものとなった。だが歴史的事件を骨糸に多様な人物像をからませる記録の手法は「開けゆく道」に受けつがれ「東より陽の昇るがごとく」に流れこむことになる。

1938年、1300年事件発生によって彼は帰国し、タキン党専従活動家となる。理論家テインペーミンの第一回目の挫折はこの時体験された。1300年事件がティントウン変革の根本要因とされていないのはこの体験がからんでいるからである。この闘争を一気に独立武装蜂起に持ちこもうとする人々に対し、彼は時期尚早論をとった。組織に計らず学生ストライキの早期終結を指導し、彼はタキン党を除名された。36年スト当時とは反対の行動となった。作家の中では誰よりも早く組織の必要性を説きながら組織の中では個人プレーに走る一匹狼的性格は、闘争の激化複雑化にともない表面化しはじめた。この苦境は彼にシナリオという新しいジャンルに挑む機会を与えた。映画ディレクター、シナリオ作家として生計をたてたのである。1940年に出版された第三の長編「現代の悪霊」は人気小説となり、長編小説家としての彼の地位を確立させた。自分自身の苦悩の体験がその作品に主人公の心理中心の進行という新手法をもたらしたのである。同年彼はタキン党に復帰し、同時に人民革命党にも入党した。だが日本軍の手を借りたビルマ独立という方針に疑問を持ち、1942年日本軍進攻と同時にインドに亡命した。一部インド共産党員と親交を深め抗日宣伝活動に従事した後、1944年ビルマ共産党に入党した。1945年、同党書記長に任じられて帰国する。

だが彼の共産党員としての寿命は短い。彼は第二回目の政治的挫折をむかえる。1946年には英連邦初の共産党員閣僚になるなど一見輝かしい政治活動の舞台裏で、激烈な思想闘争がおこなわれていたからである。その思想的右傾化と組織原則を破る行動により、彼は公的活動を徐々に制限された。1948年3月、ビルマ共産党が武力革命路線をかけた地下に入ると同時に彼は離党した。同年8月、クーデター未遂で逮捕され1年間服役した。服役中第四の長編「開けゆく道」が着手された。それは1945年から46年のビルマ南部を舞台に、名もなき善意の人々の生きざまをとおし、中央政界における社会党共産党の団結を訴え作者の政治的立場を弁明した。時代と個人のかかわりに関する心理描写はここではじめてあらわれた。政治における挫折は文学において再び新たな境地を開いたようであった。

「ダベイフマウチャウンダー」「開けゆく道」は共にビルマ独立闘争を描きながら作者の立場を訴えるせつばつまった執筆動機を持つ政治的作品であった。同じく独立闘争を扱いながら「東よ

り陽の昇るがごとく」には直接の政治的執筆動機はない。過去を再現する作業がここでは異なった意味を持つ。ビルマで最初にマルクスレーニン主義を唱えた人物の1人でありながらビルマ共産党とは相容れず、ロマンをかけたクーデターも挫折した。築こうとするものが次々と崩れ去った1950年、彼は過去をふりかえる中で自分の原点を求めた。「自分が経験してきたことだがはっきり正確にさせたかったし、自分の当時の気持を再び取り戻したかった。」⁽²⁶⁾と彼は執筆当時を回想する。状況を冷静に客観的につかもうと彼は当時の新聞や1300年事件に関する本をひもといた。彼の挫折の第一歩となったその事件を山場にすえ、彼は過去をゆっくりたどった。彼は時代と個人の内面のより深い追求に成功した。個人の自己変革の過程は「グベイフマウチャウンダー」の時代には問題ではなかった。運動の未分化な時期にはその英雄像を示すだけで人々を鼓舞するのに十分であった。運動の前進と複雑化は時代の波の間で苦悩し変革される個人の姿を生みだした。ニョートウンもティントウンも共にビルマ独立運動の申し子であった。1948年1月のビルマ独立は「東より陽の昇るがごとく」のフィナーレを飾るほど華やかなものではなかった。問題は山積し、ビルマの政治をになうはずの抗日統一戦線バサバラは崩壊真近だったからである。ティンペーミンは社共を中心に思想信条の異なる人々が抗日という共通の目標のもとに結終したこのバサバラを理想の形態と考え、その理想をはるかにのぞむ抗日運動の萌芽で作品の幕を閉じたのであった。過去の再現は彼に新たな確信をもたらしたか。

ティンペーミンは1951年政界に復帰した。だがこの復帰そのものが彼の第三回目の政治的挫折のはじまりであった。彼はいくつかの政党に入りそしてその政党を捨てた。地下ではビルマ共産党を中心に強力な反乱軍が活動が続け、中央政界は離合集散の渦中にあった。ティンペーミンを「政治の海で波間に揺れる小舟の船頭」にたとえた作家グゴンターヤーは、当時の彼の姿を回想する。「政党内活動とは、自分の信念を党全体のそれと一致させることだ。党の信頼を得る能力だ。自分の弦がきつくてもゆるくても音楽は出ない。弦が一致してこそ音楽が出る。彼は自分の弦を自分に合わせたので他の音と不協和音をおこしたのだ。」⁽²⁸⁾ティンペーミンの本質は政党という集団に適合しなかった。政界の波間に見え隠れした船頭が得たものは「和平の破壊者…日和見主義者…分裂主義者、反共主義者、無原則的統一主義者」⁽³⁰⁾等種々の罵声であった。

三度目の挫折は彼の小説に何かを還元したか。彼は1962年の軍事政権登場で完全に政界を去った。1964年、50才をむかえた彼の回想は10年前のそれとは異なる。「あのころ私が敗北したと思った思想、私が実践できず挫折した事業が、今成就した。」⁽³¹⁾三度目の挫折を彼は挫折とはとらえない。彼は軍事政権のかかげるビルマ式社会主義が自分の理想を実現することを信じ政界を去ったのである。彼は文学に専念してよき小説を数多く書くはずであった。だが彼の作風は大きく変化した。独立闘争は小説のテーマとならず、その後のニョートウンやティントウンの姿も描かれることはなかった。政治色は姿を消し、日常生活をこまかに観察する随想風私小説が新たに登場した。純粹の創作は激減し、代わって紀行、随想等ノンフィクションが増加した。かつての鋭い筆、深い洞察力も「社会主義ビルマ」を正面から小説に描くことはなかった。彼が積極的に協力した軍事

政権ではあったが、その厳しい出版統制の中で彼自身も筆を無難な方向へ向けざるを得なくなったからでもある。

お わ り に

悩みつつ成長するティントウン像は、挫折により傷ついたティンペーミンの魂であった。ティントウンがニョートウンのその後の姿となり得なかったのは作者をめぐる苛酷な情勢のためであった。ミヤタンティンは中年となったニョートウンに最後に語らせる。「私は時代がどう変ろうと『ダベイフマウチャウンダー』のニョートウンです。現在の私の気概、私の魂は、あの頃のニョートウンの気概、ニョートウンの魂です。変わりやしません。変わったとするのなら、発展的変化はしたでしょうよ。歴史というのはらせん階段みたいに発展するっていうじゃないですか。はっはっはっ⁽³²⁾。」ミヤタンティンが期待したのは、変わらないニョートウン、ニョートウンの魂を持ち続けるティンペーミンであった。だが時代の波は容赦なくこの作家を叩き、その心の変化を余儀なくした。逆に彼が、ニョートウンの魂を持ち続けたとするならば、現代迄合法的に生きながらえただろうか。

「ダベイフマウチャウンダー」はビルマ独立闘争を描いた最初の長編小説であった。ティンペーミンのそれ以前の長編小説の手法の集大成「東より陽の昇るがごとく」は独立闘争を描く最後の長編小説となった。これらの2人の主人公は作者のたどった14年間の激動の証人として、作家亡き今も作品の中に生き続けてゆく。

<注>

- (1) Thein Pe Myint : Dhachin Soyue Ngoyadhi, 1938 (Thein Pe Myint: Wuttuto Baunggyout, 1966, Rangoon, p. 239)
- (2) Taik Soe : Wuttuto Saya Thein Pe Myint, 1964 (Taik Soe hnit Min Yu We : Myanmasa Meikpwe, vol. 1, 1966, Rangoon, p. 211)
- (3) 2作を論じたもの、2作に言及されたものは以下のとおりである。
Dagon Shwe Hmya : Myanma Nainngan Sapesumya, 1972, Rangoon, p. 68-70
Ludu U Hla : Sape Hnihnaw Pahlebwe, 1964, Mandalay, p. 161-162
Malikha : Myanma Wuttu Anyun, vol. 2, 1970, Rangoon, p. 129-150
Min Yu We : Ashega Newun Twettepama, 1966 (Taik Soe hnit Min Yu We : Myanmasa Meikpwe, vol. 2, 1966, Rangoon, p. 68-70)
Mya Than Tint : Kyunaw Setyue Yejindho Wuttumya, 1974, Rangoon, p. 204-241
南田みどり「ダベイフマウチャウンダー論」大阪外国語大学院生協議会 : Studium 4, 1975, p. 1-10
Min Kyaw : Myanma Wuttushe (Saou Sape, vol. 1, 1973, Rangoon, p. 19)
Kyaw Aung : Myanma Wuttushe (Saou Sape, vol. 1, 1973, Rangoon, p. 50)
Maung Thein Sain : Myanma Wuttushe Yehan Nainshinjet (Saou Sape, vol. 1, 1973, Rangoon, p. 78-79)
Maung Tha Ra : Myanma Wuttushe hma Zatsaungmya (Saou Sape, vol. 1, 1973, Rangoon, p. 107-109)
- (4) 「東より陽の昇るがごとく」は1951-53年、月刊ミャワディ誌に連載されたが、出版されたのは1958年である。サベペイマン賞は1948年にはじまり、その年度の優秀な文学に与えられる。

- (5) 1929～、小説家、翻訳家、評論家。抗日闘争にビルマ共産党員として参加。1946年ビルマ共産党分裂後離党。1948年より創作を開始。ロシア文学の翻訳も多い。
- (6) 1936年2月～5月。学生の処分問題に端を発し、1600名中700名の学生が学業をボイコットした。
- (7) Mya Than Tint : Kyunaw Setyue Yejindho Wuttumya, 1974, Rangoon, p. 228
- (8) 1948年、彼はターヤー誌に「時代に遅れる作家達」という論文を発表し、文学は労働者、農民等被抑圧階級解放の立場に立つべきだと説いた。それを支持する作家と芸術至上主義を唱える作家の間に生じた論争をさす。
- (9) Thein Pe Myint : Thi Tha Pyoun, 1968, Rangoon. 1968年度民族文学賞受賞作品。
- (10) Thein Pe Myint : Tet Khit Natso, 1940, Rangoon. 執筆の翌年に出版。
- (11) Mya Than Tint : Dataung go Kyawwue Mipinle go Phyatme, 1973, Rangoon
- (12) 1978年1月5日テインペーミンが意識不明となる2日前の筆者とのインタビュー。(1月15日死亡)
- (13) 1934年1月から35年1月迄ダゴン誌に連載された長編 *Meinma Thuyegaung* は未完成のため出版されていない。
- (14) Thein Pe Myint : Sape Swenwebwe, 1970, Rangoon, p. 55
- (15) Thein Pe Myint : Lanza Pawbyi, 1949, Rangoon. 1948年執筆で翌年に出版。
- (16) テインペーミンの父が測量師であった。測量師は農地を検査し収穫の予想をたて地租を査定する下級官吏である。
- (17) 1938年から39年にかけて発生した大暴動。反インド人暴動、イエナングジャウン石油労働者2000名のラングーンへの示威行進、これを支援するタキン党指導者の逮捕、これに抗議する学生ストライキ等一連の闘争により独立への布石となった。1938年はビルマ暦1300年にあたる。
- (18) 別名 *Do Bama Asi Ayoun* (我等ビルマ協会)。党員は互いの名の前に *Takhin* (主人) をつけて呼び合い、ビルマ人が英国人やインド人の奴隷ではないことを示した。1930年の反インド人暴動をきっかけに設立されビルマ独立運動の母体となった。
- (19) 当時中間階級の大部分から農業労働者の一部にインド人が浸透し、ビルマ人の憎悪的となっていた。一回教徒の仏教批判の書が原因で暴動が発生した。
- (20) Thein Pe Myint : Kala Bama Taikpwe, 1938, Rangoon. テインペーミンは「印緬紛争」と題する左記の小冊子を出版し、民族間の反目は英帝国主義者に益するものであると主張した。作品ではティントウンがこれを読み、テインペーミンからも話をきいたことになっている。
- (21) 1300年事件を契機に1939年、いくつかのマルクス主義学習会が発足し、それらが各々合流してビルマ共産党と人民革命党(1945・9、ビルマ社会党と改称)が創立された。当時2党の違いは人脈的なものにとどまっていた。
- (22) Mya Than Tint : Kyunaw Setyue Yejindho Wuttumya, p. 227
- (23) Thein Pe Myint : Kyunaw Wuttudehma Kyunaw Zatsaungmya, 1969, Rangoon, p. 49
- (24) 仏教徒ビルマ人の常として五戒は日常生活の中に浸透している。
- (25) *Dagon Taya* : Thein Pe Myint dhomahout Anikhit (*Dagon Taya* : Youk Pon Hlwa, 1955, Rangoon, p. 122)
- (26) Thein Pe Myint : Sape Swenwebwe, p. 54
- (27) 反ファシズム人民自由連盟のビルマ名の略称。1944年8月、陸軍、人民革命党、共産党、労働者農民等多様な階層を結集し結成され、1945年3月抗日蜂起した。その後革命党共産党間の溝が深まる。
- (28) 1919～。作家、詩人、評論家。
- (29) *Dagon Taya* : 前掲書、p. 128-129。
- (30) *Lanzin Dhadinza Saya Apwe* : Ngeinchanye hnit Thein Pe Myint Andaye, 1963, Rangoon, p. 33
- (31) *Min Yu We* : Pyithu Sayesaya Thein Pe Myint (*Myawadi Magazine* vol. 6, No. 4, 1978.2, p. 18)
- (32) Mya Thant Tin : 前掲書、p. 231